

# researchmapについて

<http://researchmap.jp/>

平成27年9月1日

科学技術振興機構

白石淳子

# 本日の内容

- researchmapとは
- 利用方法
- 他システムとの連携
- 活用事例

# researchmapの画面例

http://researchmap.jp/

日本語 | [English](#) | [新規登録](#) | [ログイン](#)

## ▶ researchmap

▶ [ホーム](#) | [研究者検索](#) | [コミュニティ検索](#)

- ▶ [トップページ](#)
  - [学術・研究イベント](#)
  - [人材募集](#)
  - [研究者ブログ新着!](#)
  - [研究講義資料新着!](#)
  - [researchmapとは](#)
  - [FAQ](#)
  - [お問い合わせ](#)
  - [サービス利用規約](#)
  - [新規登録について](#)
  - [研究者のみなさまへ](#)
  - [リンクについて](#)
  - [R&Rシンポジウム2013](#)
- ▶ [ピックアップ研究者](#)

### 紛争解決に 貢献できる人文学へ。

埼玉大学  
鶴見 太郎 准教授



公開日: 2015/08/03

### 山はある、 と思わなければ登れない。



統計数理研究所  
小山 慎介 准教授

公開日: 2015/07/01

### 「しかも安全に」を 実現する量子の通信



情報通信研究機構  
佐々木 雅英 室長

公開日: 2015/06/01

### ゾウのゲノムから わかったこと。



東京大学  
新村 芳人 特任准教授

公開日: 2015/05/01

[記事一覧を見る](#)

# researchmapとは

- 日本の研究者総覧DB。国内の研究者情報の分散・非効率性を解消し一元管理を目指す
- 運営主体はJST。JSTからの委託によりシステムの研究開発をNIIが実施

The screenshot displays the researchmap website interface. At the top, there is a navigation bar with the 'researchmap' logo, language options (日本語 | English), and links for '新規登録' (New Registration) and 'ログイン' (Login). Below the navigation bar, there are tabs for 'ホーム' (Home), '研究者検索' (Researcher Search), and 'コミュニティ検索' (Community Search).

The main content area features a large banner for '紛争解決に貢献できる人文学へ。' (Contributing to Conflict Resolution in Humanities) featuring 梶見 太郎 准教授 (Associate Professor Taro Kajimi) from 埼玉大学 (Saitama University). Below this banner are three smaller featured articles:

- '山はある、と思わなければ登れない。' (There are mountains, but you can't climb them unless you think so.) by 小山 慎介 准教授 (Associate Professor Shinpei Koyma) from 材料数値研究所 (Materials Numerical Research Institute).
- '[しかも安全に]を実現する量子の通信' (Realizing quantum communication [and safely]). by 佐々木 雅英 室長 (Director Masahide Sasaki) from 情報通信研究機構 (National Institute of Information and Communications Technology).
- 'ゾウのゲノムからわかったこと。' (What we learned from the elephant genome.) by 新村 芳人 特任准教授 (Special Assistant Professor Yoshito Shinmura) from 東京大学 (University of Tokyo).

On the right side, there is a 'COUNTER' section and a detailed profile for 新井 紀子 (Kiko Arai). The profile includes a photo, a 'J-GLOBAL' logo, and the update date '更新日: 15/05/22 09:10'. The profile details are as follows:

研究者氏名	新井 紀子 アライ ノリコ
eメール	arai@nii.ac.jp
所属	国立情報学研究所
部署	社会共有知研究センター
職名	センター長・教授
学位	博士(理学)(東京工業大学)
その他の所属	総合研究大学院大学

Below the profile is a 'プロフィール' (Profile) section with a detailed biography in Japanese, mentioning her background at the University of Tokyo and her work on the NetCommons system and the ReadD project.

COUNTER

RE

## 新井 紀子

J-GLOBAL

更新日: 15/06/



**研究者氏名** 新井 紀子  
アライ ノリコ

**eメール** arai@nii.ac.jp

**所属** 国立情報学研究所

**部署** 社会共有知研究センター

**職名** センター長・教授

**学位** 博士(理学)(東京工業大学)

**その他の所属** 総合研究大学院大学

つながるコンテンツへ

### プロフィール

東京都出身。一橋大学法学部およびイリノイ大学卒業、イリノイ大学大学院数学科修了。博士(学)。

専門は数理論理学(証明論)・知識共有・協調学習・数学教育。2001年より、教育機関・公共機の情報共有基盤システムNetCommonsを開発。現在、3000を超える機関でポータルサイトやウェアとして活用されている。2009年より学術研究情報の循環型情報活用基盤システムResearchを開発、2011年にResearchmapとJSTが提供するReaDを統合、ReaD&Researchmapとして扱っている。2011年より人工知能プロジェクト「ロボットは東大に入れるか」プロジェクトディレクター。

主著に「ハッピーになれる算数」「生き抜くための数学入門」(イーストプレス)、「数学は言(東京図書)」、「コンピュータが仕事を奪う」(日本経済新聞出版社)、「ロボットは東大に入れるか」(イーストプレス)など。

※取材・講演のご依頼は、広報普及課でとりまとめてお返事を差し上げています。お手数ですが普及課までご連絡ください。

kouhou@nii.ac.jp

※取材をご希望の方はまず[ま]のブログ記事をお読みください。

[https://researchmap.jp/jo3nb8ki1-78/#\\_78](https://researchmap.jp/jo3nb8ki1-78/#_78)

※たくさんの講演のご依頼をいただき、心より感謝しております。本務に支障が生じないよう講き受けは最大年間40までとさせていただきます、公平性を保てるよう優先順位を設けてお受けしてあげます。どうぞご理解ください。

### 経歴

テキストで表示 1

2008年2月 - 現在	国立情報学研究所	社会共有知研究センター センター長
2006年4月 - 現在	国立情報学研究所	情報社会相関研究系 教授

### 経歴

テキストで表示 1 2 3 >

2008年2月 - 現在	国立情報学研究所	社会共有知研究センター センター長
2006年4月 - 現在	国立情報学研究所	情報社会相関研究系 教授
2006年4月 - 現在	総合研究大学院大学	複合科学研究科情報学専攻 教授
2009年4月 - 2010年3月	国際基督教大学	Othmer記念自然科学客員教授
2006年4月 - 2008年3月	東京工業大学大学院	情報理工学研究所 連携教授

### 受賞

テキストで表示 1 2 >

2015年2月	雑学クラブ 雑学出版賞 「ロボットは東大に入れるか」	受賞者: イースト・プレス
2012年9月	人工知能学会 全国大会優秀賞 (口頭発表部門) 生物情報基盤構築のための生物種データのLinked Open Data化の試み	受賞者: 武田英明,南佳孝,加藤文彦,大向一輝,新井紀子,神保宇嗣,伊藤元己,小林悟志,川本祥子
2010年4月	文部科学省 科学技術分野の文部科学大臣表彰 理解増進部門	受賞者: 新井紀子,舛川竜治
2009年10月	情報処理推進機構 日本OSS奨励賞	
2009年3月	8th IASTED International Conference on Web-Based Education 優秀論文賞	受賞者: Noriko H. Arai, Ryuji Masukawa

### 論文

テキストで表示 1 2 3 4 >

[The impact of A.I. - Can a robot get into The University of Tokyo?](#)

Noriko H. Arai

National Science Review [査読有り][招待有り]

[The impact of A.I. on education - Can a robot get into the University of Tokyo?](#)

Noriko H. Arai, Takuya Matsuzaki

The Proceedings of The 22nd International Conference on Computers in Education 1034-1042 2014年12月 [査読有り][招待有り]

[CMSを合理的に選択するためのソフトウェア特性指標の策定](#)

Fumihiko Kumeno, Yuuta Kohama and Noriko Arai

ソフトウェアエンジニアリングシンポジウム2014 (SES2014) 2014年9月 [査読有り]

[Development of a database module for information literacy education through the construction of collective knowledge](#)

Shingo Sugawara, Ryuji Masukawa, Kazuki Hyodo, Noriko H Arai

Proceedings of the 16th IASTED International Conference Computer and Advanced Technology in Education (CATE2014) 15-22 2014年7月 [査読有り]

# researchmapとは(歴史)

年月日	内容
平成10年8月1日	[ReaD]提供開始
平成14年度	[ReaD]文部科学省国立情報学研究所が実施してきた「大学等の研究活動を総覧するデータベース構築のための調査」および「学術研究活動に関する調査」を引き継ぐ
平成21年4月	[Researchmap]提供開始
平成21年度	[ReaD]研究機関情報、研究者情報、研究課題情報の日本語詳細画面をJ-GLOBAL(科学技術総合リンクセンター)上で表示開始
平成23年11月1日	[ReaD&Researchmap]研究者情報の登録・更新システムとして、ReaDとResearchmapを統合したReaD&Researchmapを提供開始。
平成26年4月1日	[researchmap]ReaD&Researchmapはresearchmapに名称を変更。
平成27年4月1日	[researchmap]独立行政法人を国立研究開発法人に名称変更。

# researchmapとは(収録情報)

カテゴリ	登録件数	情報項目
研究機関	3,383機関	研究機関名称、所在地、沿革、研究分野、事業概要など
研究者	240,445人	氏名、所属機関、職名、研究分野、研究テーマ、研究業績など

平成27年4月1日現在

# researchmapとは(登録対象者)

- 日本国内で研究活動を行っている研究者、  
海外で研究活動を行っている日本人研究者
- 研究支援者
- 博士課程の学生

# researchmapとは(統計情報)

## ■ 登録研究者数

- 240,445人  
(H27年4月時点)

## ■ 登録情報更新者数

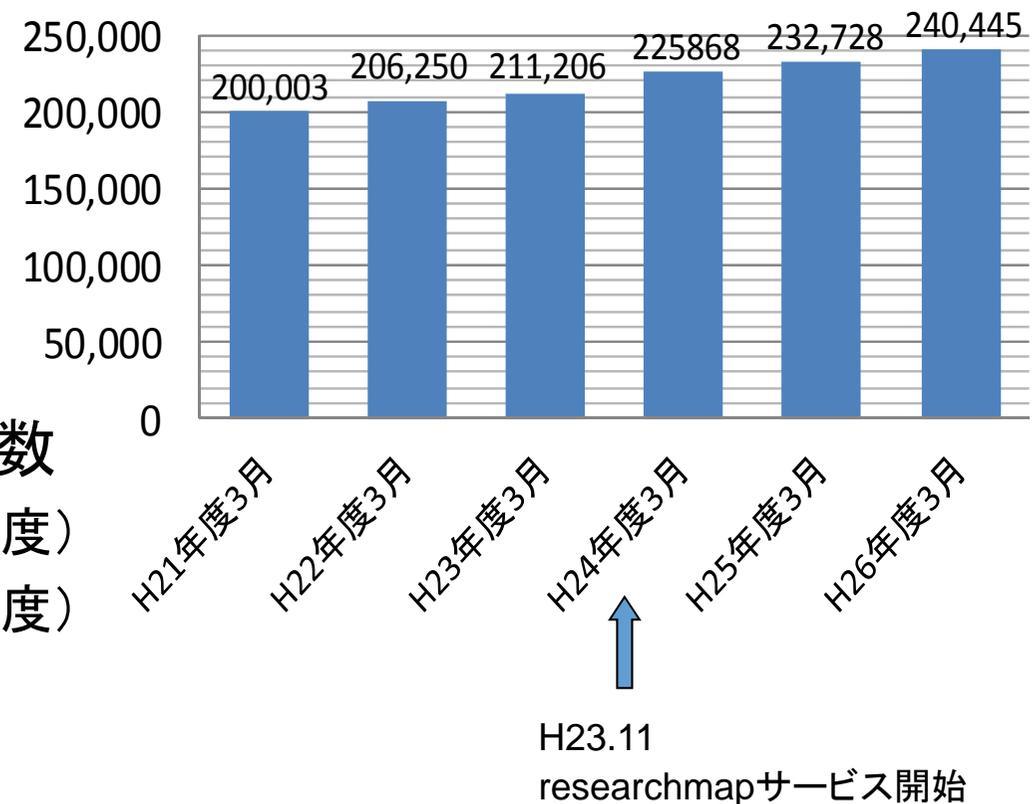
- 約60,000人(H26年度)  
(初期登録時は含んでいない)

## ■ マイポータルへのアクセス数

- 約19,250,000pv/年(H25年度)
- 約19,000,000pv/年(H26年度)

マイポータル:各研究者のページ

### 登録研究者数の推移



# researchmap登録状況

	項目	登録率	登録者の平均登録数		項目	登録率	登録者の平均登録数
1	研究キーワード	66.9%	5.4	12	所属学協会	65%	5.4
2	研究分野	69.7%	3.2	13	Works	21.7%	10.2
3	経歴	45%	6.0	14	競争的資金等の研究課題	72.7%	4.2
4	学歴	65.7%	3.4	15	特許	5.4%	7.9
5	受賞	20.2%	3.3	16	社会貢献	0.2%	7.1
6	委員歴	26.1%	5.1	17	その他	2.5%	4.1
7	書籍等出版物	38.8%	9.1	18	学位	63%	-
8	MISC	64.8%	46.8	19	性別を明らかにしている人	80.8%	(登録者全体に占める男女比) 男66.6% 女14.2%
9	論文	10.4%	38.0				
10	講演・口頭発表	17.1%	46.0				
11	担当経験のある科目	3.3%	8.4				

平成26年5月時点

注) ReaDの論文に登録されていたものをMISCに移行したため、MISCの登録率が高い

# 利用方法

- 研究者自身による登録・更新
  - Webインターフェース
  - 4通りの初期登録方法
    - 科研費研究者番号を記載して登録
    - 既に登録されている研究者からの招待による登録
    - e-Radからの登録
    - 研究業績を1件記載して、登録申請(確認後に招待)
- 研究機関による一括登録・更新
  - Webインターフェースで研究機関担当者がアップロード、夜間更新

# 一括登録・更新を実施している機関

国立大学	公立大学	私立大学	高等専門学校	
北海道地方				
小樽商科大学				
東北地方				
東北大学	福島県立医科大学			
山形大学				
関東地方				
茨城大学	横浜市立大学	埼玉医科大学	東京都市大学	
筑波大学		千葉工業大学	立教大学	
群馬大学		和洋女子大学	立正大学	
お茶の水女子大学		慶應義塾大学	亜細亜大学	
東京学芸大学		国士舘大学	国際基督教大学	
東京農工大学		上智大学	玉川大学	
電気通信大学		専修大学	東京女子体育大学	
横浜国立大学		中央大学	武蔵野大学	
		東京電機大学	明星大学	
		東京理科大学	創価大学	
		日本大学	日本大学短期大学部	
		日本女子大学	亜細亜大学短期大学部	
中部地方				
金沢大学			金沢工業大学	金沢工業高等専門学校
福井大学		金沢医科大学		
愛知教育大学		諏訪東京理科大学		
		日本福祉大学		
近畿地方				
滋賀大学		京都産業大学	龍谷大学	
神戸大学		同志社大学	大阪経済大学	
奈良女子大学		佛教大学	大阪産業大学	
滋賀医科大学		立命館大学	関西大学	
中国地方				
岡山大学	広島市立大学	山口東京理科大学		
四国地方				
香川大学				
高知大学				
九州地方				
九州工業大学	宮崎大学	中村学園大学	立命館アジア太平洋大学	
熊本大学	琉球大学	福岡大学	中村学園大学短期大学部	

※実施機関の中で同意いただいた機関のみ掲載しています。

## 研究者がresearchmapでできること

- 業績情報の管理を一元化
  - 異動、転職しても所属を変更して引き続き利用可能
- 研究者氏名、所属、経歴、学歴、その他各種業績の登録
- 業績情報の登録時には、外部データベースの情報を利用することが可能(フィード機能)
  - Amazon、ArXiv、CiNii (article, books)、DBLP、e-Rad、J-GLOBAL、KAKEN、ORCID、PubMed、Scopus
- SNSとしての利用(コミュニティ、ブログ)

# 利用方法(業績のフィード)

- 業績情報の登録時に、外部DBの利用が可能
- 利用できる外部DB
  - Amazon、ArXiv、CiNii (article, books)、DBLP、e-Rad、J-GLOBAL、KAKEN、ORCID、PubMed、Scopus



# 利用方法(業績のフィード)

基本項目 業績リスト 権限設定 シボレス設定

日本語 英語(English)

外部システムからの

研究キーワード

研究分野

経歴

学歴

委員歴

受賞

論文

Misc

書籍等出版物

講演・口頭発表等

担当経験のある科目

所属学協会

Works

競争的資金等の研究課題

特許

社会貢献活動

その他

編集を終了

閉じる

以下の外部システムから業績リストを取り込みます。

経歴の取り込み

- ・ 科研費データベース

論文の取り込み

- ・ DBLP
- ・ PubMed
- ・ ORCID

論文・Miscの取り込み

- ・ CiNii Articles
- ・ J-GLOBAL (Web of Scienceの論文を一部含む)
- ・ arXiv
- ・ Scopus

書籍の取り込み

- ・ Amazon
- ・ CiNii Books

競争的資金等の研究課題の取り込み

- ・ 科研費取得状況

特許の取り込み

- ・ J-GLOBAL



Scopusからの論文取り込み

Scopusから、あなたの論文を取り込むことができます。

著者検索 論文検索

著者の姓 Jibu 著者の名 Mari 所属

検索

日本語CVに取り込む  英語CVに取り込む

論文 総件数: 1件

全選択 全解除

Jibu, Mari ID:6602875180  
Doshisha University, Kyoto, Japan

【収録論文: 15件】 全て表示

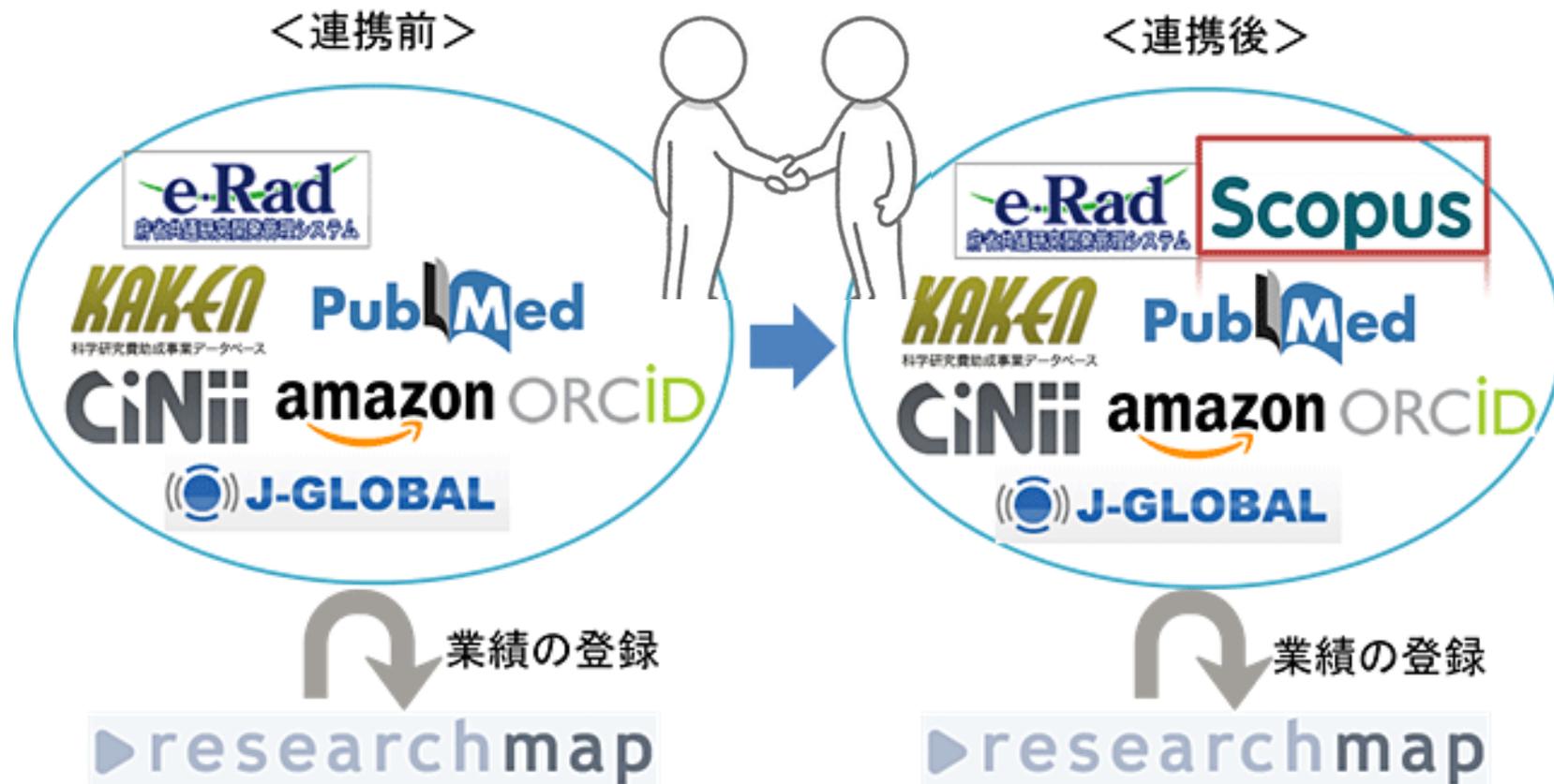
- Refined R&D indicators for pharmaceutical industry
- Mapping of scientific patenting: toward the development of 'J-GLOBAL foresight'
- An analysis of the achievements of JST operations through scientific patenting: Linkage between patents and scientific papers

全選択 全解除 総件数: 1件

決定 キャンセル

# Scopusとresearchmapの連携

- H27年5月21日より、外部DBとしてScopusとの連携開始



## 他システムとの関係（e-Radとの連携）

- H25年1月15日より連携開始
- e-Rad申請時にresearchmapに登録済みの業績情報を利用することができる
- e-Radに新規登録した業績情報をresearchmapに取り込むことができる
- e-Radに登録している所属情報変更時に、researchmapの所属情報も変更することができる

## 他システムとの関係（シングルサインオン）

- H24年5月より学術認証フェデレーションにアイデンティティプロバイダー（IdP）として参加する機関の認証によるシングルサインオンでの利用が可能となった
- 74IdPとのシングルサインオンが可能

# 他システムとの関係 (WebAPIの提供)

- 大学・研究機関の研究者総覧や業績管理システム構築をサポート
- APIの種類
  - 機関名、氏名等をキーとした検索結果のリスト取得
  - 研究者コード等をキーとした研究者の業績の公開情報の取得
  - ピックアップ研究者API
- 現時点で55機関が利用

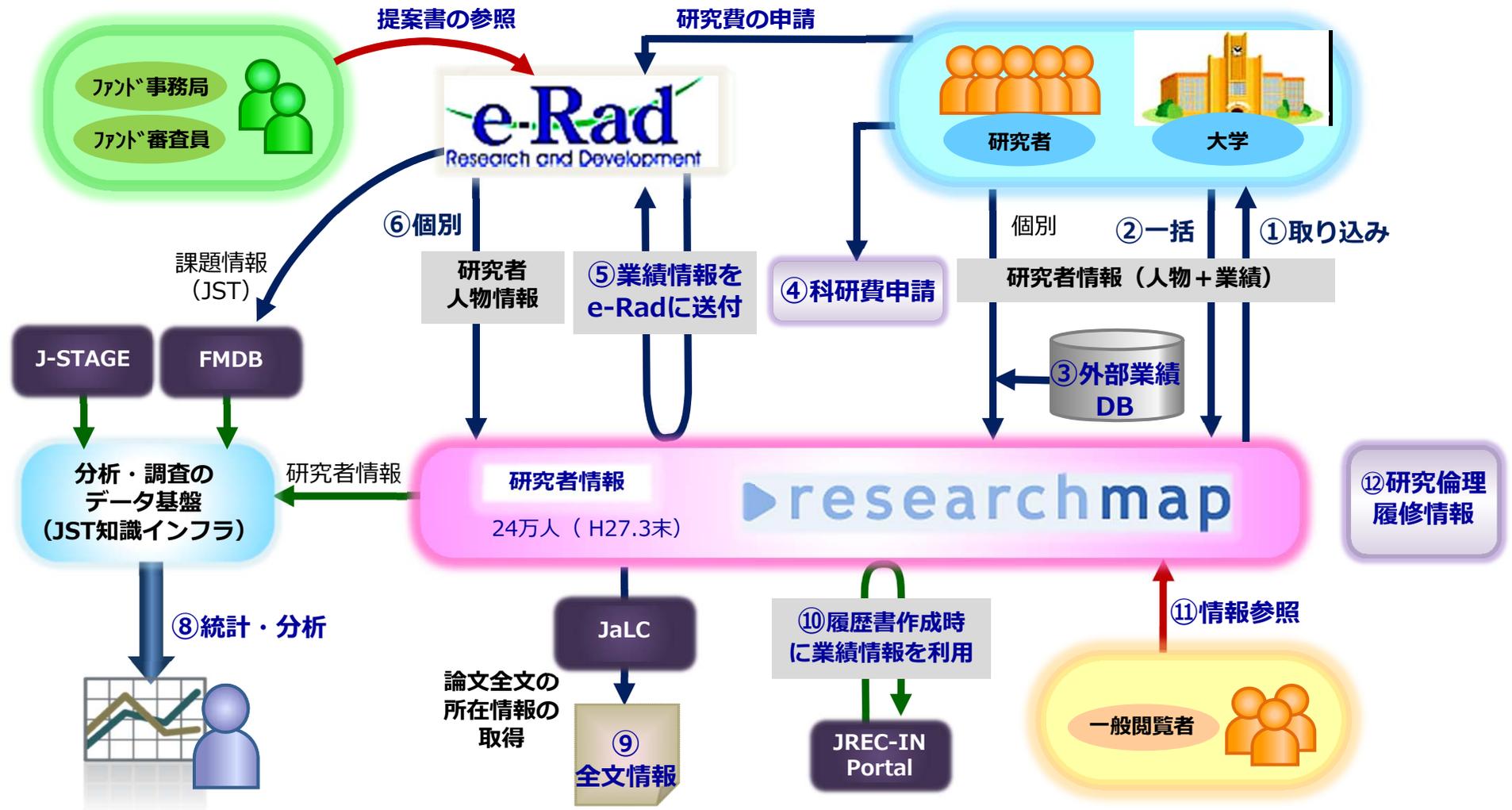
# J-GLOBALの画面例

この画面は、J-GLOBALの研究者詳細情報ページです。研究者名「坂内悟」の検索結果が表示されています。プロフィールには所属機関「独立行政法人科学技術振興機構 知識基盤情報部」や研究キーワード「情報検索、検索システム、データベース」が記載されています。また、関連検索、共著の研究者、共同発明の研究者などのリストも提供されています。

http://jglobal.jst.go.jp/

この画面は、研究者の著書・文献・特許の一覧ページです。所属機関「慶応義塾大学」が確認できます。論文9件のリストが表示されており、各論文のタイトル、著者、発行年、および全文リンクなどの詳細情報が提供されています。

# 他システムとの連携（現状）



## researchmapの活用

- researchmapをマスターデータとして使用する大学の増加
  - ① 研究者情報を自機関のDBに取り込み、研究者総覧として整備
  - ② 自機関ではDBを持たず、リンクを貼って利用
- 大学共同利用機関 情報・システム研究機構の「羽ばたけ日本の女性研究者」との連携
- e-Radによる競争的資金申請時にresearchmapの業績データを使用
- JSTのファンド管理においてresearchmapの研究者情報を利用

## researchmapの活用

- 研究者人材データベース（JREC-IN Portal）との連携により、JREC-IN Portalで履歴書入力の際にresearchmap業績データ等を取り込み可能に。  
(平成26年10月)

学位		researchmapからフィード		リセット
年	月	学位		
<input type="text"/>	<input type="text"/>	(称号名) <b>必須</b>	※該当ない場合は、「なし」と入力 <input type="text"/>	
		(授与大学等名称)	<input type="text"/>	
		(学位論文題目)	<input type="text"/>	
<input type="text"/>	<input type="text"/>	(称号名)	<input type="text"/>	
		(授与大学等名称)	<input type="text"/>	
		(学位論文題目)	<input type="text"/>	

[上に戻る](#)

## researchmapの活用

- 学校教育法施行規則の「教育研究活動等の状況についての情報を公表するものとする」での活用
  - researchmapの各人のページであるマイポータルへのリンクや、大学名で検索した結果の画面へのリンクを大学のホームページに用意するなどresearchmapを利用した情報の公開でも良いとの見解を文科省から得ている

## 問い合わせ先

- JSTサービス支援センターまでご連絡ください  
<https://researchmap.jp/public/inquiry/>

## IRによる大学データの可視化・意思決定・情報公開

藤井翔太

大阪大学未来戦略機構戦略企画室  
 特任助教

2015年9月1日  
 第1回RA協議会セッション@信州大学  
 「競争力を向上させるための大学分析」

## 発表者の紹介

- 藤井翔太：大阪大学未来戦略機構戦略企画室特任助教  
 IRチーム：ランキングなど国際ベンチマーキング、評価に関する調査など
- 研究：歴史学（近現代イギリス史・スポーツ史）  
 イギリスにおけるプロ・スポーツのガバナンス→大学のガバナンス  
 →元来統計や調査の専門家ではない⇔歴史学の視点も含めて制度・文化の分析
- AdministrationとResearchの狭間で  
 主業務は研究力の可視化・分析・評価⇔スポーツ史研究（科研若手B）も  
 ⇒二つの意味で不可避な問題としての研究力の可視化

## 本発表の目的

- 大学のガバナンスにおけるIRの重要性  
 第三期：評価指標→意思決定のためのIRがより重要に  
 ＊学内外データの把握→分析・ベンチマーキング→戦略・情報公開
- 海外における事例の紹介：イギリスを中心に  
 海外の研究・教育評価（→予算配分）：共通の指標に基づく評価が先行  
 →評価の方向性と大学の対応について紹介・検討：REF, NSS
- 大阪大学におけるIRの紹介  
 大阪大学未来戦略機構戦略企画室：大阪大学のIRを担当  
 →各種調査・分析、データベースなどの事例を紹介

## イギリスの状況

- ランキングの母国イギリス：“League Table”  
 THE, QS：イギリスの企業によって運営される主要大学ランキング  
 +国内の様々な評価による大学のランキング化：REF, NSS, 各種国内ランキングなど
  - REF：大学の研究評価のための枠組み  
 前身のRAEから続く研究評価：HEFCEによる包括的研究費傾斜配分に利用
  - NSS：全国共通の学生満足度調査  
 2005年開始：共通項目による卒業時調査
- ⇒共通点：国による評価＋比較可能なデータの蓄積

## 研究評価REF2014の概要

- REF (Research Excellence Framework) とは？  
6年周期、研究費の傾斜配分に利用（総収入5%、研究費総額の20%程度）  
→REF2014から評価指標が変更
  - REF2014概要：36の分野別評価（詳細は次ページ）  
評価パネル（大分類単位）によるピアレビュー⇔大部分は定量的評価
  - 評価指標：Outputs, Impact, Environmentの3指標  
研究成果（Outputs）・研究環境（Environment）＋影響力（Impact）が加わる  
←社会的要請（e.g. 学費の値上げ）
- ⇒データ・書類は公開＋研究成果は原則オープンアクセス

## 研究領域

### Units of assessment

A:生命科学、B:理工学、C:社会科学、D:人文科学

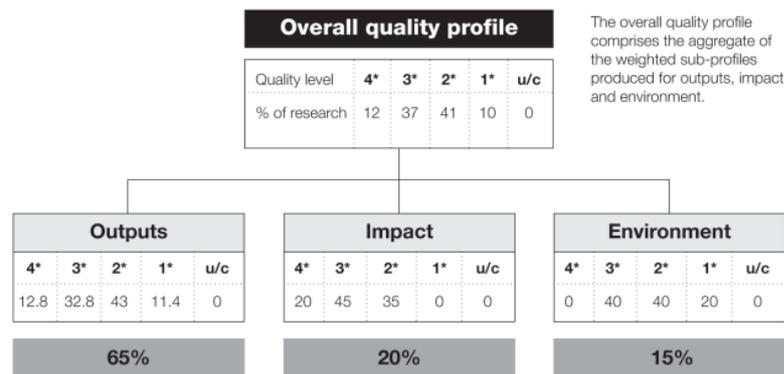
Main panel	Unit of assessment
A	1 Clinical Medicine
	2 Public Health, Health Services and Primary Care
	3 Allied Health Professions, Dentistry, Nursing and Pharmacy
	4 Psychology, Psychiatry and Neuroscience
	5 Biological Sciences
	6 Agriculture, Veterinary and Food Science
B	7 Earth Systems and Environmental Sciences
	8 Chemistry
	9 Physics
	10 Mathematical Sciences
	11 Computer Science and Informatics
	12 Aeronautical, Mechanical, Chemical and Manufacturing Engineering
	13 Electrical and Electronic Engineering, Metallurgy and Materials
	14 Civil and Construction Engineering
15 General Engineering	
C	16 Architecture, Built Environment and Planning
	17 Geography, Environmental Studies and Archaeology
	18 Economics and Econometrics
	19 Business and Management Studies
	20 Law
	21 Politics and International Studies
	22 Social Work and Social Policy
	23 Sociology
	24 Anthropology and Development Studies
	25 Education
	26 Sport and Exercise Sciences, Leisure and Tourism
D	27 Area Studies
	28 Modern Languages and Linguistics
	29 English Language and Literature
	30 History
	31 Classics
	32 Philosophy
	33 Theology and Religious Studies
	34 Art and Design: History, Practice and Theory
	35 Music, Drama, Dance and Performing Arts
	36 Communication, Cultural and Media Studies, Library and Information Management

REF, Assessment framework and guidance on submission, p.49,  
from <http://www.ref.ac.uk/media/ref/content/pub/assessmentframeworkandguidanceonsubmissions/GOS%20including%20addendum.pdf>

4\* (world-leading)  
3\* (internationally excellent)  
2\* (recognised internationally)  
1\* (recognised nationally)  
U/C (評価に値せず)

# 評価指標

Figure B1 Building a quality profile: a worked example



・ Output (65%)  
研究のアウトプットの質を被引用Impactなど定量的なデータによって評価。評価対象となるアウトプットを一人につき最大4点提出する。(説明資料は不要)

・ Impact (20%)  
政策・社会・経済・文化に与えた影響を評価。どのような影響を与えたのか、ストーリーを作成し文書で説明する。

・ Environment (15%)  
研究環境・設備に関する定量的項目(獲得した研究費、博士号授与数など)、研究の継続性を評価。

## Outputs (REF2)

30 - History  
De Montfort University

Search output title / volume title in this submission  
Search

Showing outputs 1 - 50 of 50

**Output title** "One time he could-'a' been, the champion of the world": Bob ...  
**Output type** D - Journal article  
**Volume title** Sport in Society  
**Year** 2013  
**DOI** 10.1080/17430437.2013.810430

**Output title** A social history of English Rugby Union.  
**Output type** A - Authored book  
**Volume title**  
**Year** 2009  
**DOI**

Outputs  
論文・著作・データベース等成果物の情報のみ

## Environment (REF4a/b/c, REF5)

30 - History  
De Montfort University

Research degrees awarded (REF4a)

	2008-09	2009-10	2010-11	2011-12	2012-13
Number of research doctoral degrees awarded by academic year	4.00	1.00	2.00	2.00	5.00

Research income & research income-in-kind (REF4b/c)

Source	2008-09	2009-10	2010-11	2011-12	2012-13
BIS Research Councils, Royal Society, British Academy and Royal Society of Edinburgh	£5,391	£4,479	£1,734	£22,408	£30,795
BIS Research Councils income-in-kind	£0	£0	£0	£0	£0
UK-based charities (open competitive process)	£20,606	£5,000	£0	£38,169	£45,802
UK-based charities (other)	£0	£0	£14,662	£0	£0
UK central government bodies, local authorities, health and hospital authorities	£67,069	£5,575	£0	£0	£23,588

Environment  
博士号授与数、研究収入など、定量的データのみのみ

## Impact case study (REF3b)

Institution: De Montfort University  
Unit of Assessment: 30 History

Title of case study: Sport and the British: The History of Sport and the Public

### 1. Summary of the impact

This case study is centred on public understanding of the history of sport. Dominant public narratives have tended to trivialise sports' historical role in society. Working with media outlets and public bodies, the International Centre for Sports History and Culture (ICSHC) has utilised its ground-breaking research to enhance public understanding, and raise the profile, of the role of sport in history. The centrepiece of its impact strategy has been to establish its own mass media project, and this was achieved through its collaboration with BBC Radio Four on the 'Sport and the British' series between 2009 and 2013. The main beneficiaries of this impact have been the BBC, its listeners and wider sections of the general public. Alongside the enhancement of public understanding of sports history and the contribution to cultural life facilitated by the BBC series and associated activities, the research of the ICSHC team has informed and influenced popular sports history publishing, and contributed to the policy of public history providers and the content of their sites.

### 2. Underpinning research

Based at DMU, the ICSHC is the leading research unit for the historical study of sport and leisure in the world. Established in 1996, it is made up of world leading researchers in the history of sport, with a particular focus on rugby (Collins) and football (Carter, Mason, Porter, Taylor and Williams) as well as on sport and heroism (Holt), sport and business (Porter), sport and the military (Mason), sport and international diffusion (Collins, Holt, Mason and Taylor) and women's sport (Williams). Researchers in the Centre have made a significant contribution to the field through monographs, edited collections, peer-reviewed journal articles, theoretical analyses and general histories. They have led developments in the field through editorships of key journals and book series and the creation and joint organisation (Porter) of the UK's leading research seminar series in the field (the Institute of Historical Research's 'Sport and Leisure History', from 2009). Taken together, this research and research leadership has been instrumental in securing widespread recognition within the wider discipline of the importance of sport in our understanding of social, cultural and political change.

Professor Collins (Research Fellow at DMU, 1998-2006; 2011 - Director of ICSHC, Leeds Metropolitan University 2006-2011) is an international expert in the history of rugby in Britain and beyond. In an interlinked series of three books - *Rugby's Great Split* (1998, revised edition 2006), *Rugby League in Twentieth Century Britain* (2006) and *A Social History of English Rugby Union* (2009) - Collins has outlined the unique history of a sport polarised and fractured around two cultural and athletic antipodes, rugby league and rugby union. These works have established the distinctiveness of the two sports' cultures and demonstrated their relationship to broader social developments within the British working and middle classes over the past 150 years. Collins's most recent book, *Sport in Capitalist Society* (2013) examines the emergence of modern sport as an integral part of the globalisation of capitalism. Taken together, these studies offer a unique window on the history of class relations in the modern era and represent a key example of the return to class themes among social historians of Britain. Collins's research sits alongside other significant research on sport and social relations at DMU, undertaken by Mason (at DMU as Professor of History from 2000), Porter (Senior Research Fellow from 2004 and Professor of History since 2012) and Taylor (Junior Research Fellow, 1993-2001 and Professor of History from 2007).

Professor Holt's (Professor of History at DMU since 1996) research examines the history of sport in Britain and France, with a particular emphasis on comparative sporting cultures, sports heroes and amateur ideology and the diffusion of sport. His co-written *Sport in Britain, 1945-2000* (2000) built upon his ground-breaking 1989 study *Sport and the British* to explore the contemporary history of British sport, while co-edited collections on European sports heroes and sport and the transformation of Europe has extended his work on comparative sporting histories and cultures. His research is widely debated in sports and leisure and mainstream history journals and has received special attention in the British Society of Sports History, which in 2011 devoted a special issue of its journal to his work and made him one of its inaugural Fellows. Connected research within the ICSHC on sporting celebrity and cultural transfer includes the work of Carter (Senior

大阪大学  
OSAKA UNIVERSITY

22世紀に輝く  
調和ある多様性の創造

## 評価結果の提示

REF公式HPより  
http://results.ref.ac.uk/Results/ByUoa/30

30 - History

pdf UOA summary sheet

Overall profiles **Outputs** Impact Environment

Select institution link to view submission  Hide all profiles

% of the submission meeting the standard for:

4\* 3\* 2\* 1\* U/C

FTE Category A staff submitted

Institution	Overall	4*	3*	2*	1*	U/C	FTE
Anglia Ruskin University	8	26	44	14	8	5.50	
	<b>Outputs</b>	12.5	33.3	45.9	8.3	0.0	
	<b>Impact</b>	0.0	0.0	40.0	20.0	40.0	
	<b>Environment</b>	0.0	30.0	40.0	30.0	0.0	

4\*(world-leading)  
3\*(internationally excellent)  
2\*(recognised internationally)  
1\*(recognised nationally)  
U/C(評価に値せず)

大阪大学  
OSAKA UNIVERSITY

22世紀に輝く  
調和ある多様性の創造

## REFの影響

- 研究計画・研究領域のコントロール  
どの領域に、どの研究者を応募するかは大学が決める  
→学際的研究領域も増える中で、部局・ユニットの壁を越えた把握が必要
- 比較可能な評価結果：ランキング化も  
研究ユニットの規模・研究内容・効果全て公開+同一指標による比較可能  
→THEなどのメディアによって分野別のランキング化  
→直接的効果（予算配分）+間接的効果（他の予算に繋がる評判）

⇒あらゆる研究活動の追跡が必要：Impactの追加  
研究成果（主に論文）・研究環境（予算・博士号）+Impact（研究の波及効果）  
→研究予算・成果・影響の一連のプロセスを把握する仕組み（システム）が不可欠

Overall		Outputs		Impact								
<b>30 History</b>												
1	2.70	Birmingham	37	45	3.32	124	Sussex	48	3.26	Hertfordshire	100	4.00
2	2.75	York	35	42	3.31	114	Sheffield	42	3.25	Aberdeen	73	3.73
=3	2.95	Southampton	31	43	3.30	101	Southampton	38	3.23	King's College London	68	3.68
=3	2.90	Sheffield	27	45	3.30	91	Manchester	42	3.21	Glasgow	66	3.66
=5	2.75	King's College London	40	44	3.29	131	Birmingham	40	3.20	De Montfort	60	3.60
=5	2.95	Hertfordshire	12	45	3.29	39	York	36	3.18	Birmingham	58	3.58
7	3.00	Warwick	39	46	3.28	128	Exeter	38	3.14	St Andrews	58	3.58
8	3.00	Oxford	130	45	3.26	424	King's College London	35	3.13	Queen Mary	58	3.50
9	2.75	Exeter	42	43	3.25	135	Warwick	37	3.11	York	50	3.50
=10	2.95	Cambridge	115	44	3.24	373	Cambridge	36	3.10	Royal Holloway	50	3.50
=10	2.70	Manchester	25	42	3.24	82	Birkbeck	35	3.10	Southampton	60	3.50
=12	2.75	St Andrews	37	43	3.23	120	Leicester	25	3.10	Leeds	50	3.50
=12	2.75	Leeds	30	39	3.23	96	UEA	35	3.09	Open	50	3.50
14	2.95	UCL	42	42	3.22	136	Cardiff	36	3.09	UWE	50	3.50
=15	2.80	Queen Mary	38	40	3.21	122	Oxford	35	3.08	UHI	50	3.50
=15	2.80	Sussex	20	39	3.21	64	LSE	33	3.08	Warwick	48	3.40
17	2.40	Cardiff	14	37	3.19	46	Lincoln	35	3.08	Queen's Belfast	40	3.40
=18	2.75	Glasgow	44	40	3.18	139	Leeds	31	3.07	Durham	50	3.40
=18	2.95	Birkbeck	36	35	3.18	113	Durham	32	3.07	Sheffield	60	3.40
=18	2.70	Durham	29	38	3.18	91	Northumbria	31	3.07	Manchester Met	40	3.40
=21	2.90	LSE	44	34	3.15	139	St Andrews	37	3.06	Stirling	40	3.40
=21	2.70	Queen's Belfast	30	33	3.15	93	Sheffield Hallam	33	3.04	Swansea	37	3.37
23	2.60	Leicester	27	30	3.14	85	Keele	30	3.04	Lancaster	37	3.37
24	2.65	Edinburgh	61	32	3.13	192	Edinburgh	30	3.03	Essex	50	3.37
25	2.65	Lancaster	20	30	3.12	61	UCL	32	3.03	Edinburgh	40	3.34
26	2.70	UEA	35	33	3.09	108	Queen's Belfast	31	3.03	Oxford	44	3.33
=27	3.00	Liverpool	23	34	3.07	71	Reading	25	3.02	Liverpool	47	3.33
=27	2.55	Swansea	20	27	3.07	61	Hertfordshire	27	3.02	Cambridge	51	3.32
29	2.60	Keele	13	21	3.03	38	Lancaster	29	3.01	Birkbeck	32	3.32
30	2.40	Open	14	27	3.02	43	Queen Mary	28	3.00	Manchester	50	3.30

公表された結果に基づき、Times Higher Education紙がスコアをGPA化し、分野ごとのランキング表として掲載している。Times Higher Education, 2014, No.2 より

## ブリストル大学の対応

- RED (Research and Enterprise Development) の存在  
イギリス有数の規模・質の組織：研究者としての経験（⇔事務主導）  
2008年設立→徐々に規模を拡大（現在50人弱）：業務の一つがREFへの対応
- 統合データベースの構築：“Pure”を中核にした体制構築  
論文＋研究費＋管理運営＋社会貢献 etc.：研究に関わるあらゆる活動を収集・把握  
部局・研究ユニット・個人単位で分析可能＋オープンアクセスの強化（レポジトリと連動）
- Impactと広報戦略との連動  
研究ユニット単位でImpactに関するパンフレット作成  
→Impact Case Studyのベース作り＋大学としての広報活動の連動（＋研究者の意識改革）  
⇒研究戦略（学内シーズ）＋広報戦略＋予算獲得など大学全体の動きと連動





大  
OS

Impact Story  
23



University of  
BRISTOL



University of  
BRISTOL



維  
新  
の  
創  
始

## The Cabot Project

Uncovering an historical mystery

**Overview**

This is the story of an historian, the unpublished lifework of an academic, and how analysing a book proposal led to an international collaborative research initiative known as The Cabot Project.



**Key facts:**

- Dr Evan Jones can be contacted at [evan.jones@bristol.ac.uk](mailto:evan.jones@bristol.ac.uk)

**Further reading**

- 2008 Jones, E.T. 'Alwyn Ruddock: John Cabot and the Discovery of America' *Historical Research*, 81,212, pp244-254
- 2010 Jones, E.T. Henry VII and the Bristol expeditions to North America: the Cordón documents *Historical Research*, 83, pp444-454

Dr Evan Jones in the Department of History is an economic historian working on Bristol's discovery voyages of the late 15th and early 16th centuries.

John Cabot, also known as Giovanni Caboto, was a Venetian explorer and navigator whose 1482 discovery of parts of North America is commonly held to have been the first European encounter with that continent since the Norse Vikings in the eleventh century. Having received backing from Henry VII, Cabot sailed from the port of Bristol with his local supporters, which has resulted in his adoption as a key figure in the city's history.

Dr Alwyn Ruddock was the expert on Cabot and his voyages, having dominated research in this field from the 1950s. She claimed to have uncovered information that would revolutionise contemporary understanding of Europe's engagement with North America since 1497. Sadly, despite plans to produce a book on the subject with The University of Exeter Press, by the time of her death in 2006, her findings remained unpublished and furthermore, she left instructions to burn the work after her death.

Evan found out about these instructions in 2006. He tried to prevent the destruction of Ruddock's work, but to no avail. Rumours about her findings were rife and Evan set out to determine her claims.

Starting with the archives of The University of Exeter Press, Evan was allowed access to the author correspondence file. The book proposal presented an outline of her findings including the revolutionary claims regarding the understanding of Cabot's early voyages. These revealed new information about Cabot, such as sources alluding to the fate of the 1488 expedition, never previously known, and evidence of a religious mission to Newfoundland, Canada, including the construction of the first church in North America. While there were no formal document references, the book proposal provided lots of leads and clues for further investigation. In short, even this outline contained a significant amount of revelatory information and Evan wanted to make it publicly available.

First, Evan wrote an academic article about Ruddock's research, published in *Historical Review*, in which he analysed her claims based on her book proposal, going through it chapter by chapter. The article was met with a great deal of public interest, both in Bristol and Canada, and was picked up by the media. Evan saw this as a great opportunity to encourage people who may have known Dr Ruddock to share their stories of her in the hope of completing the story uncovered thus far.

One such contact was the new owner of Dr Ruddock's house, who found out about Evan's work after reading about his research in the press. As a result, Evan visited the house in Mithurst, Hampshire, where amazingly, some of her papers and microfilms were still in existence. The discovery of this information filled important gaps such as the names of the Florentine bankers who had funded Cabot's journey, opening up new avenues of investigation through analysis of bank records.

As the project grew, other materials came to light. Given the great public interest in the exploits of John Cabot, millions of people had followed the story in the media and many came forward with important information. Some of this information has been used by Evan to update the page on John Cabot in Wikipedia, using the page as an effective way of sharing research findings with the public and as a tool to garner further public contribution. All these developments have resulted in the research becoming an international collaboration, encompassing academics in Italy, Canada, Australia and the United States. It also led to him receiving additional funding, of £120,000, from a private Canadian benefactor.

"It was tragic that Dr Ruddock's life work was potentially lost to us all" said Evan. "However, making this mystery public has revitalised the research and I am now working to continue the story in collaboration with colleagues in England, Florence, Melbourne, St John's and Washington DC."

Throughout the project, Evan has made sure that he has acknowledged Dr Ruddock's contribution to the research. The findings to date have changed our understanding about Europe's interactions with North America in the 15th century and would have remained buried, were it not for an investigative historian.

March 2012

If you have a project or collaboration that you wish to discuss with the University, then contact our Research and Enterprise Development team

73

[www.bristol.ac.uk/red](http://www.bristol.ac.uk/red)

If you have a project or collaboration that you wish to discuss with the University, then contact our Research and Enterprise Development team

74

[www.bristol.ac.uk/red](http://www.bristol.ac.uk/red)



大阪大学  
OSAKA UNIVERSITY

# 学生満足度調査NSS

22世紀に輝く  
創始ある多様性の創造

- **NSS (National Student Survey) : 2005年開始**  
卒業直前の学生による満足度調査：全国共通の質問項目を使用し比較可能  
質問項目：コース、教員の対応、学習環境など
- **比較可能な形で結果が公開：UNISTATS**  
大学・コースを選択して比較可能（生活費・就職率・卒業後の給与なども）  
⇒大学進学を考える高校生の判断材料の一つに
- **NSSの背景：学費の値上がり＋統計情報の蓄積**  
イギリス人学生の学費値上げ（特に2009年以降）：経験調査ではなく満足度調査  
＋HESA（高等教育統計局）：ベンチマーキングを可能にする体制の整備  
  
⇒ステークホルダーとしての学生の重要性

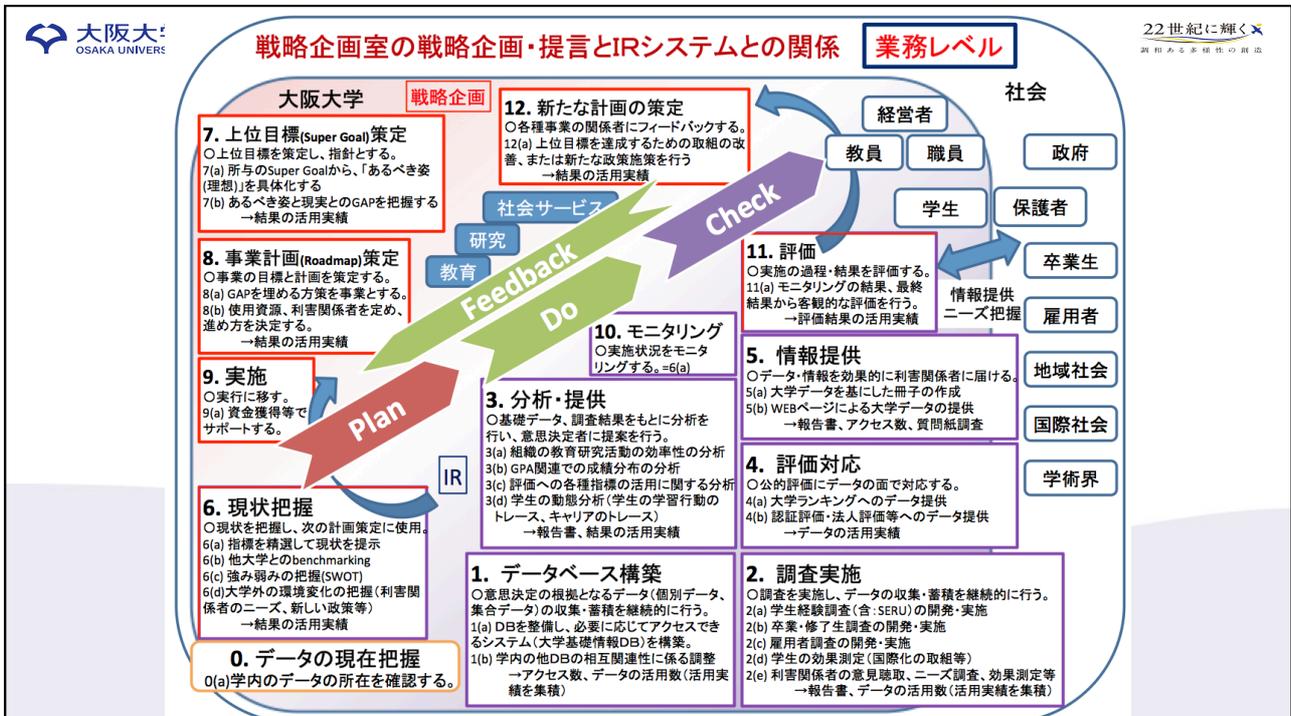
Course	BA (Hons) Contemporary History and Politics Full time	BA (Hons) History Full time	BA (Hons) History Full time
Location	Birkbeck, University Of London 1 location: Birkbeck College - Bloomsbury Campus	The University Of Birmingham 1 location: Edgbaston campus	University Of Bristol 1 location: University of Bristol
<b>Student satisfaction</b> <a href="#">View all</a>			
Overall, I am satisfied with the quality of the course	85%	92%	85%
Staff are good at explaining things	100%	98%	93%
Staff have made the subject interesting	87%	90%	94%
Feedback on my work has been prompt	75%	74%	47%
Feedback on my work has helped me clarify things I did not understand	76%	74%	67%
I have received sufficient advice and support with my studies	84%	82%	68%
The library resources and services are good enough for my needs	79%	86%	63%

Course	BA (Hons) Contemporary History and Politics Full time	BA (Hons) History Full time	BA (Hons) History Full time
Location	Birkbeck, University Of London 1 location: Birkbeck College - Bloomsbury Campus	The University Of Birmingham 1 location: Edgbaston campus	University Of Bristol 1 location: University of Bristol
<b>Salary information</b>			
Average salary six months after the course		£17,000	£18,000
Typical salary range		£14,000 - £22,000	£15,000 - £21,000
<b>Average salary across the UK after taking a similar course</b>			
after six months		£17,000	£18,000
(salary range)		£14,000 - £20,000	£14,000 - £21,000
after 40 months		£22,000	£23,000
(salary range)		£18,000 - £26,000	£19,000 - £27,000
<b>After the course</b>			
<b>Accreditation</b>			

## 大阪大学におけるIR

- IRの業務紹介：未来戦略機構戦略企画室IRチーム
- データ→分析・ベンチマークへ：データ統合、調査  
データの把握→より高度な分析：データ統合による構成員単位での活動の把握  
ベンチマーキング・高度な分析を意識した調査：SERUを核にした学生調査
- データの可視化→意思決定・情報公開  
データ統合・調査を通じたベンチマーキング基盤確立の次のステップ  
→データの可視化：Tableauを通じた「分かりやすく、欲しいデータ」の可視化  
⇒可視化を通じて内外のステークホルダーの意思決定・情報公開へ



## 大阪大学の業務システム

- 今後の大学運営のありかた  
 大学全体の価値創造に向けた機動的で効果的な大学運営を実現  
 →業務システム・データベースの効果的な運用が重要  
 ＊第3期中期計画期間：定量的なデータに基づく評価の進展
- 問題点：構成員の活動を適切に把握できていない  
 教育学務、財務、人事システムなど、業務毎にITシステムが構築  
 →業務に則した形でデータを管理⇔構成員の活動として管理されていない  
 ＊教育学務システムにおける「授業」  
 財務システムにおける「組織」及び「研究グループ」

21

## 大阪大学の学内システム

### 大阪大学基礎データシステム

- 教育研究活動を部局単位で取りまとめた「全学基礎データ」と個々の教員ごとにまとめた「教員基礎データ」から構成される

### 学務情報システム(KOAN)

- 教育に関する事柄をWeb上で包括的に支援するシステム

### 財務会計システム

- 財務会計に関するデータを主に扱い、その報告書である財務諸表を作成するシステム

### 人事給与システム

- 人事制度、給与計算、給与制度等の人事情報を一元的に記録及び管理し、業務の効率化を図るシステム

### 大阪大学全学IT認証基盤サービス

- 大学内の様々な情報システムを統合的かつ安全に機能する認証サービス
- 本学の構成員に大阪大学個人IDを付与し、これにより統合的な認証基盤を提供
- ITシステム毎に個別にパスワードを入力する作業がなくなり、ITシステムの安全性、利便性に寄与

22

## 大阪大学の学外システム・データベース

### researchmap

- 科学技術振興機構が運用している日本の研究者総覧として、国内最大級の研究者情報のデータベースである。国内の大学及び公的研究機関に関する研究機関情報、研究者情報等を網羅的に収集、提供
- 大阪大学では、「教員基礎データ」を通じて「論文・著書」に関するデータを提供

### 府省共通研究開発管理システム(e-Rad)

- 競争的資金制度を中心として研究開発管理に係る応募受付から、審査、採択、採択課題管理、成果報告といった一連のプロセスをオンラインで手続き可能な府省横断システム
- 大阪大学においては、一部の課題を除き、e-Radを利用して科学研究費補助金の交付申請書の作成

### 論文データベース(Elsevier・Thomson Reuters)

- Elsevier社のScopus, Scival, Pure、Thomson Reuters社のESI, Web of Science, InCitesを利用
- 主に研究IRチーム(URA)が大学全体・部局の研究状況の把握、国内外の大学とのベンチマーキングに利用
- 部局のURA相当のスタッフで利用し、部局独自の戦略策定に利用する例も

⋮

23

## データ統合によるIR業務の効率化

- 目的
  - 個々の部局に新たな負担をかけることなく、より詳細に大学の活動実態を明らかにする
- 取組
  - 学内で保持するデータを統合するとともに、BIツールにより多面的かつ網羅的な分析と可視化を実現
    1. 名寄せ
    2. 構成員レベルでデータ統合
    3. Tableauによる分析及び可視化

24

## 大阪大学における学生調査

- **学生調査：学生の経験・能力の把握**  
 教育改革（主体的学習・学習成果）＋ステークホルダーとしての重要性  
 ＊アンケートベースで主観的⇔段階別把握・ベンチマーキング可能
- **多様な調査：入学時調査・SERU・卒業時調査・卒業生調査**  
 →入学時・在学生・卒業時・卒業生に一部同じ質問項目を使って調査  
 +企業調査：企業関係者による阪大生の能力イメージと比較

⇒入学時から卒業後までの各段階の阪大生の経験・能力・満足度  
 +ステークホルダーからみた阪大生の能力の把握・比較

＊SERU：在学中の学生に関する国際的に比較可能な調査

25

## SERUの概要

(Student Experience Survey in Research University)

- UCUES(University of California Undergraduate Experience Survey)を元に、カリフォルニア大学バークレー校高等教育研究センターを中心に、アメリカ大学協会に所属する州立の研究大学が集まり、全米の研究大学の調査として形成。
- 「研究大学の学生（学部生）経験」
- 2012年より国際的な研究大学を招待し、SERU-Iを形成。年に一度のシンポジウム開催。
- 大阪大学が2013年4月にコンソーシアムに参加、広島大学が2015年に参加。

26

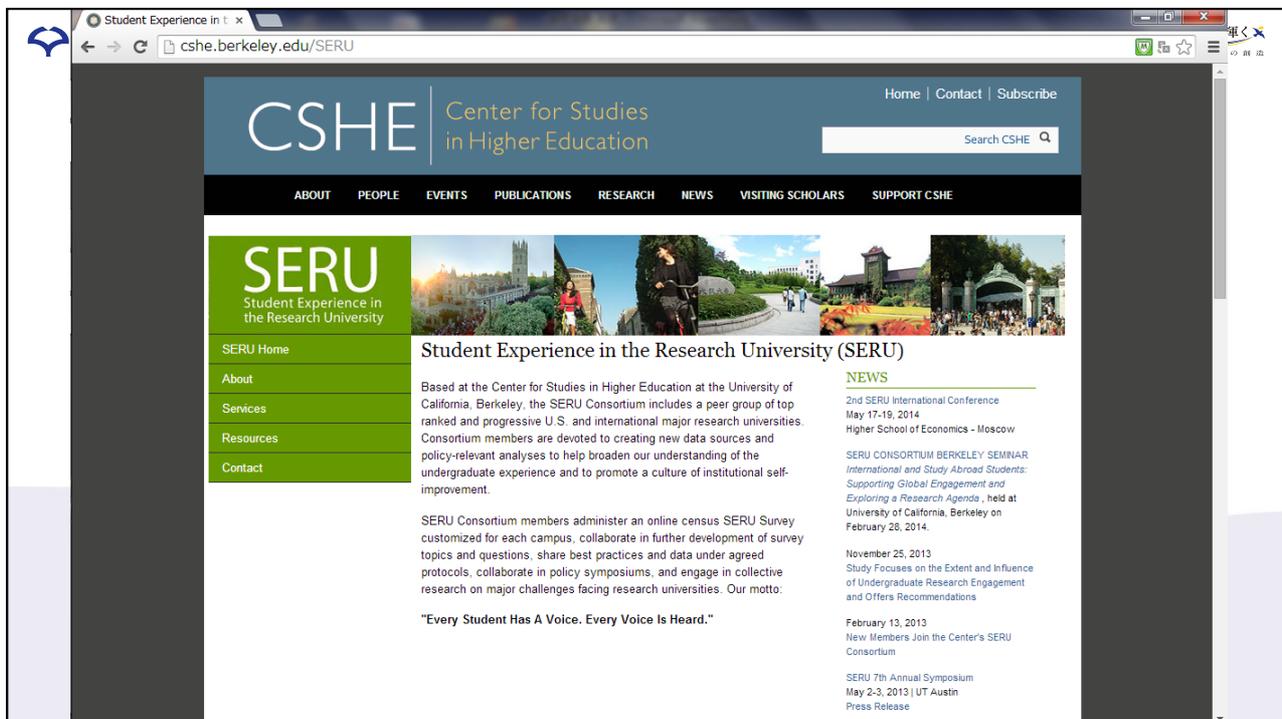
# SERUの概要

## (Student Experience Survey in Research University)

### 実施体制

- ・ 会費制
- ・ 招待ベース（研究大学であることが原則）
- ・ 各大学の質問紙は共同で制作
- ・ 質問紙調査の実施は英国の会社  
International Graduate Insight Group (i-graduate)  
ネゴシエーションの必要
- ・ 他大学のデータの閲覧  
一部大学ではあるがベンチマーキングには十分  
原則として他大のデータは非公開だが条件付きで公開可能

27



The screenshot shows the website for the Center for Studies in Higher Education (CSHE) at the University of California, Berkeley, specifically the Student Experience in the Research University (SERU) page. The page features a navigation menu with links for Home, Contact, and Subscribe. Below the navigation is a search bar and a menu with links for ABOUT, PEOPLE, EVENTS, PUBLICATIONS, RESEARCH, NEWS, VISITING SCHOLARS, and SUPPORT CSHE. The main content area is titled "SERU Student Experience in the Research University" and includes a sidebar with links for SERU Home, About, Services, Resources, and Contact. The main text describes the SERU Consortium, which is based at CSHE and includes a peer group of top ranked and progressive U.S. and international major research universities. The consortium members are devoted to creating new data sources and policy-relevant analyses to help broaden our understanding of the undergraduate experience and to promote a culture of institutional self-improvement. The text also mentions that SERU Consortium members administer an online census SERU Survey customized for each campus, collaborate in further development of survey topics and questions, share best practices and data under agreed protocols, collaborate in policy symposiums, and engage in collective research on major challenges facing research universities. The motto is: "Every Student Has A Voice. Every Voice Is Heard." The page also features a "NEWS" section with several recent articles, including the 2nd SERU International Conference (May 17-19, 2014), the SERU Consortium Berkeley Seminar (February 28, 2014), and the SERU 7th Annual Symposium (May 2-3, 2013).

## SERUの概要

### (Student Experience Survey in Research University)

#### 参加大学

- カリフォルニア大学バークレー校、ラトガース大学、フロリダ大学、ミシガン大学、ミネソタ大学、オレゴン大学、ピッツバーグ大学、テキサス大学、南カリフォルニア大学、ノースカロライナ大学、バージニア大学、テキサスA&M、アイオワ大学、パデュー大学、インディアナ大学、ワシントン大学
- カンピーナス州立大学（ブラジル）、湖南大学（中国）、南京大學（中国）、西安交通大学（中国）、アムステルダム大学カレッジ（オランダ）、ケープタウン大学（南アフリカ）、ブリストル大学（英国）、高等経済学院（モスクワ）（ロシア）、オックスフォード大学（英国）、大阪大学（日本）、同済大学（中国）、広島大学（日本）

29

## SERUの概要

### (Student Experience Survey in Research University)

#### 質問項目（コア） 175問

- ▼学業への関わり
- ▼学生の生活と目標
- ▼キャンパスの風土
- ▼個人属性

学習経験、  
研究経験、  
能力の主観評定

#### 質問項目（オプション：一部をランダムに割振）300問

- ▼国際的なスキルと気づき
- ▼社会参画・市民参画
- ▼技術の使用

一部に回答しなくてもよい項目もあり、  
平均して250問くらい

30

## 大阪大学でのSERU調査

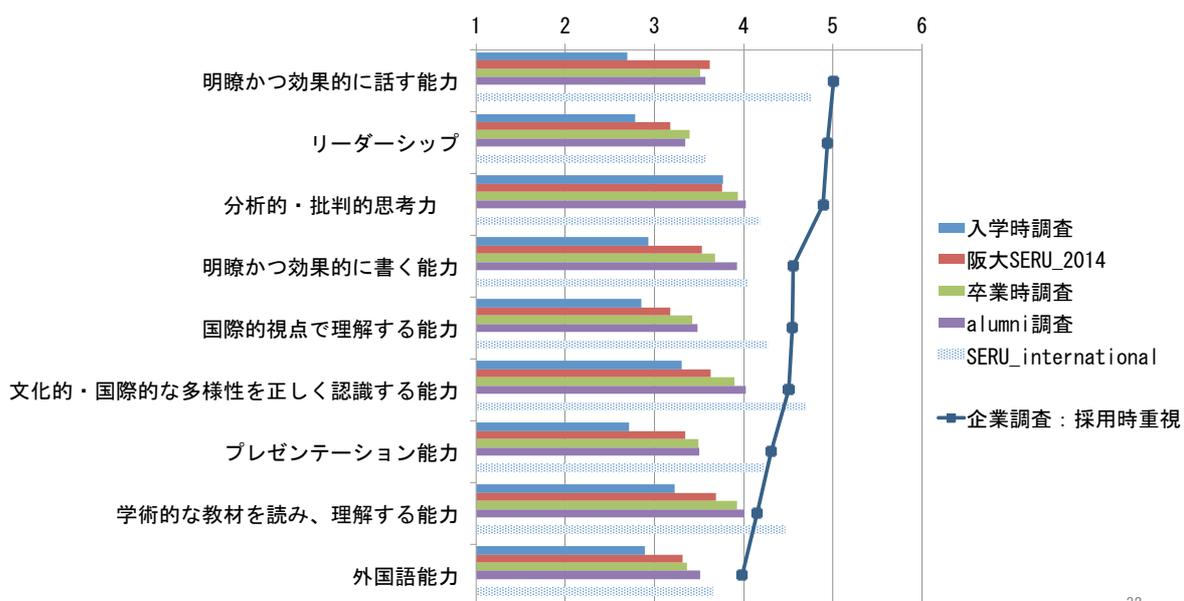
(第1回) 実施期間：2013年11月20日～12月10日  
 対象者：一部部局の学部・大学院学生全員  
 回答者数：学部299名(13.4%)、大学院生154名 (11.2%)

(第2回) 実施期間：2014年12月15日～2015年2月27日  
 対象者：大学全体の学部・大学院学生全員  
 回答者数：学部998名(6.4%)、大学院生826名 (10.4%)

方法：学務情報システムにより対象者にアンケート回答を依頼し、  
 学内専用ページにアクセスした学生が、i-graduateのサイトで回答  
 言語：日本語と英語



### 参考: 主要能力に関する企業の重視する程度と学生の主観評価



## 可視化による意思決定・情報公開

- データ統合、調査⇒現状の分析・ベンチマーキング  
分析結果をいかに意思決定者・ステークホルダーに提供するか？
- Tableauによる可視化：意思決定の基盤に  
執行部・部局の意思決定に必要な情報を柔軟かつ分かり易い形で提供  
\*IRワークショップ：学内のデータに対する意識の向上
- IRと情報公開：『IRプロジェクト』  
調査と連動した学生・教員・外部のステークホルダーへの情報公開  
⇒内外のステークホルダーそれぞれに適した形での提供



OSAKA UNIVERSITY

**IRプロジェクト**  
阪大生の学びの実態調査  
大阪大学未来戦略推進・推進企画室

勉強って、授業だけじゃない。

Support,  $s(X \rightarrow Y) = \frac{\sigma(X \cup Y)}{N}$   
Confidence,  $c(X \rightarrow Y) = \frac{\sigma(X \cup Y)}{\sigma(X)}$

え〜っ、こうなるよ...

確かこのまば...  
授業も習った?

$$EB(e) = \sum_{v_1 \in V_1} \sum_{v_2 \in V_2} \frac{\sigma_{v_1, v_2}(e)}{\sigma_{v_1, v_2}}$$

2.3時間  
短い!

学習時間 (時間)	大阪大学	海外の研究大学
授業	18.4	17.3
授業時間以外の学習	10.2	12.5

学生さんの1週間の平均学習時間 (SERU2019より)

**IR×SERU**  
プロジェクト (学生経験調査)

2.3時間の違い。  
世界と阪大生の学習習慣。

勉強を始めた阪大生の  
時間を使い方とは？ 詳細は

大阪 IR SERU  
IRって何？ 知りたい方は検索！

●「IRプロジェクト」は大阪大学の活動に関するデータを収集・分析し、大学の改善に役立てていくプロジェクトです。

34

## 展望：大学ランキングとIR

### • 大学ランキングの最近の動向

21世紀：ランキングによる大学の「格付け」⇔評価方法への批判  
⇒地域別・分野別へ \*市場の拡大：TOP100位<TOP500~1000位

### • 大学ランキングの将来：順位<ベンチマーキング

THEのデータベース変更の裏で：THE独自のチームによるデータ収集へ  
⇒より重要なのは「比較可能」なデータの蓄積：真の目的としてのコンサルティング

### • 大学にとってのランキング

順位（上げる？ 下げない？）→評判：国際・広報が対応するケースが多い？  
⇒現状把握・ベンチマーキングの機会：担当：国際→IR・URAへ

⇒積極的活用へ：データ分析・動向把握のためのIR活動

\* U-Multirank：分野別・多様な評価指標→順位付け<ポートフォリオ

## Reference

- REF 2014, <http://www.ref.ac.uk/>
- National Students Survey 2015, <http://www.thestudentsurvey.com/>
- UNISTATS (NSSの結果公開), <https://unistats.direct.gov.uk/>
- 林隆之 (2012) 「英国における大学評価 (REA、REF) の概要」 『科学技術・学術審議会研究計画・評価分科会資料』, retrieved from [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/qijyutu/qijyutu2/shiryo/\\_icsFiles/afieldfile/2012/11/13/1328060\\_1\\_5.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/qijyutu/qijyutu2/shiryo/_icsFiles/afieldfile/2012/11/13/1328060_1_5.pdf) (access on 26 May 2015)
- 林隆之、土屋俊 (2014) 「研究成果の『卓越性』指標の多様性」 『研究・技術計画学会第29回年次学術大会講演要旨集』 798-801頁。
- 大谷竜、加茂真理子、小林直人 (2012) 「英国における大学評価の新たな枠組み：Research Excellence Framework—最近の日本の研究評価の状況との比較—」 『シンセシオロジー』 6-2, 118-125頁。
- 藤井翔太 (2015) 「イギリスにおける研究力評価の動向—REF2014のImpact評価を中心に—」 『日本評価学会第12回全国大会』 (口頭発表)
- 齊藤貴浩、安倍有紀子、和嶋雄一郎、廣森聡仁、宮錦三樹、藤井翔太、前原忠信 (2015) 「SERUによる学生の経験に着目した学修成果に影響を与える要因の検討—2回のStudent Experience Survey in Research Universityの結果から—」 『日本高等教育学会第18回大会』 (口頭発表)
- 河野麻里、廣森聡仁、塚常健太、岡嶋裕子、藤井翔太、和嶋雄一郎、齊藤貴浩 (2015) 「学内システムのデータ統合によるIR業務の効率化」 『第4回大学情報・機関調査研究集会』 (口頭発表)



## Elsevier Research Intelligence

# RA協議会第1回年次大会 エルゼビア・ジャパン株式会社 セッション(C-4)

2015年9月1日 (13:10~14:40)

エルゼビア・ジャパン株式会社  
ソリューションマネージャー  
清水毅志 (t.shimizu@elsevier.com)

Empowering Knowledge

## エルゼビアの過去セミナーにおけるテーマ変遷

- ・情報リテラシー教育
- ・研究評価への支援
- ・URA(大学リサーチ・アドミニストレーター)の活動支援
- ・客観的データの活用
- ・国際共同研究の促進
- ・国際的な研究ネットワーク構築支援
- ・大学ランキングから見た国際競争力
- ・IR(インスティテューショナル・リサーチ)における個人レベルデータの重要性

RAとは、「研究者とともに研究活動の企画、マネジメント、研究成果の活用促進を行うことにより、研究活動の活性化や研究マネジメントの強化を支える業務」

教育や研究情報の数値化と  
視覚化によるデータの活用

IRとは、「大学の戦略意思決定を支援するための情報を提供する目的で、教育、研究、社会貢献、経営など大学内部のさまざまなデータの入手、蓄積、分析、活用を行う業務」

# RAやIR担当業務のピックアップ(大学評価に関して)

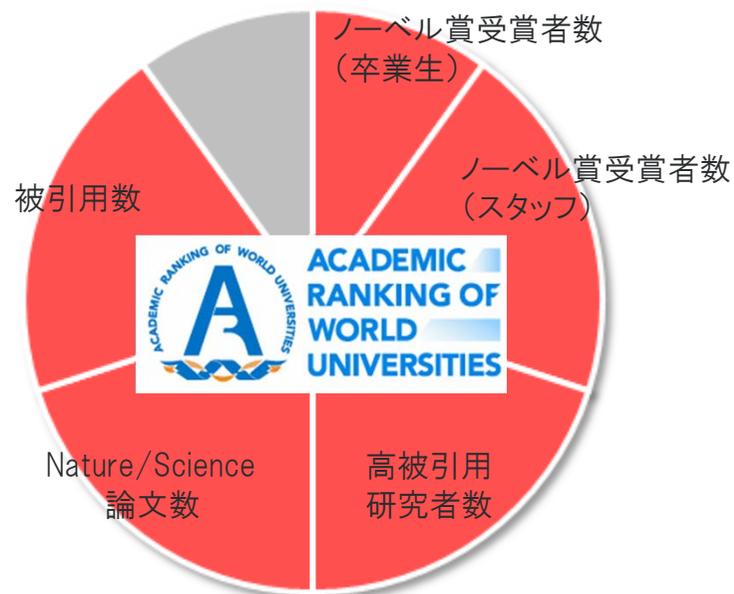
## NIADにおける研究教育評価項目の参考例(第2期中期目標期間)

教育活動に関して	研究活動に関して
教育活動の状況	研究活動の状況
・教員組織編成や教育体制の工夫とその効果	・研究実施状況(競争的資金による研究実施状況、共同研究の実施状況、受託研究の実施状況など)
・多様な教員の確保の状況とその効果	・研究成果の発表状況(論文・著書等の研究業績や学会での研究発表の状況、研究成果による知的財産権の出願・取得状況など)
・入学者選抜方法の工夫とその効果	・研究資金獲得状況(競争的資金受入状況、共同研究受入状況、受託研究受入状況、寄附金受入状況、寄附講座受入状況など)
・教員の教育力向上や職員の専門性向上のための体制の整備とその効果	・研究推進方策とその効果
・教育プログラムの質保証・質向上のための工夫とその効果	・共同利用・共同研究の実施状況、共同利用・共同研究に関する環境・資源・設備等の提供及び利用状況、共同利用・共同研究の一環として行った研究会等の実施状況
・体系的な教育課程の編成状況	
・社会のニーズに対応した教育課程の編成と実施上の工夫	
・国際通用性のある教育課程の編成・実施上の工夫	
・養成しようとする人材像に応じた効果的な教育方法の工夫	
・学生の主体的な学習を促すための取組	
教育成果の状況	研究成果の状況
・履修・修了状況から判断される学習成果の状況	学部・研究科等の組織単位で判断した研究成果の質の状況、学部・研究科等の研究成果の学術面及び社会、経済、文化面での特徴、学部・研究科等の研究成果に対する外部からの評価
・資格取得状況、学外の語学等の試験の結果、学生が受けた様々な賞の状況から判断される学習成果の状況	卓越した研究業績の根拠・実データ例
・学業の成果の達成度や満足度に関する学生アンケート等の調査結果とその分析結果	
・進路・就職状況、その他の状況から判断される在学中の学業の成果の状況	
・在学中の学業の成果に関する卒業・修了生及び進路先・就職先等の関係者への意見聴取等の結果とその分析結果	

## RAやIR担当業務のトピックス(大学ランキングに関して)

名称	作成機関	利用データベース	開始年	発表時期	分野別	評価基準と割合
	タイムズ・ハイヤー・エデュケーション社 (英国)	Scopus	2004年～	毎年10月	社会科学 医学 自然科学 工学 人文科学	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教育活動 (30%)</li> <li>・研究活動 (30%)</li> <li>・被引用数 (30%)</li> <li>・産学収入 (2.5%)</li> <li>・国際性 (7.5%)</li> </ul>
	クアクアレリ・シモンズ社 (英国)	Scopus	2004年～	毎年9月	人文科学 工学 生命科学・医学 自然科学 社会科学	<ul style="list-style-type: none"> <li>・研究者による評判調査 (40%)</li> <li>・企業による評判調査 (10%)</li> <li>・学生一人当たりの教員数 (20%)</li> <li>・外国人教員比率 (5%)</li> <li>・留学生比率 (5%)</li> <li>・教員一人あたりの被引用数 (20%)</li> </ul>
	上海交通大学 高等教育研究院 (中国)	Scopus (中国での国内 ランキングにおいて)	2003年～	毎年6月	数学 物理学 化学 コンピューター 経済学・商学	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ノーベル賞等受賞卒業生の数 (10%)</li> <li>・ノーベル賞等受賞スタッフ数 (20%)</li> <li>・高被引用研究者数 (20%)</li> <li>・ネイチャー誌とサイエンス誌の論文数 (20%)</li> <li>・被引用数 (20%)</li> <li>・大学規模 (10%)</li> </ul>
	USニュース& ワールドレポート社 (米国)	Scopus (中東地区での大学 ランキングにおいて)	2010年～	毎年10月	21の研究分野	<ul style="list-style-type: none"> <li>・世界の研究評判調査 (12.5%)</li> <li>・地域の研究評判調査 (12.5%)</li> <li>・論文数 (12.5%)</li> <li>・相対被引用インパクト (10%)</li> <li>・被引用数 (10%)</li> <li>・被引用上位10%の論文数 (12.5%)</li> <li>・被引用上位10%の論文数比率 (10%)</li> <li>・国際共著率 (10%)</li> <li>・博士号授与人数 (5%)</li> <li>・職員一人あたりの博士号授与人数(5%)</li> </ul>

## 各大学ランキングで「研究力」が占める割合



## THE大学ランキングでの評判調査の実際



ここでは、生物化学、遺伝学、分子生物学に関して世界で最も優れた研究を行っている機関として選択していただいたものをリストしています。削除したい機関があれば、機関名の隣のラジオボタンをクリックすると、その機関が自動的に削除されます。

Harvard University

世界で最も優れた研究を行っている大学/短期大学

次に、東アジアに加え、この地域外の学術機関を含む世界中の学術機関についてお考えください。生物化学、遺伝学、分子生物学の分野において世界で最も優れた研究を行っていると思われる機関を10個まで選択してください。思いつく機関がなければ、選択数が10に満たなくても結構です。選択する順序は関係ありません。学術機関にランキングを付けていただく必要はありません。

これらのリストでは学術機関全体の名称のみを示しており、個々の学部や課程は含まれていません。また、一部の機関は異なった名称で何度かリストに挙げられています。その中から最も聞き慣れた名称を選択してください。

学術機関をリストから選択したり、スペルを確認するには、ここをクリックしてください。それ以外の場合は、機関名を入力してください。

下の欄へ一度に一つの機関名をタイプし、リストが表示されたら、リストから学術機関を選択してください。

university」や「college」などの用語は、該当する機関名が多すぎるため、入力しないでください。機関名を選択すると、その機関が画面の一番上にリストされます。入力欄が空白になったら、続けて次の機関を入力してください。選択する機関数が10に満たない場合は、「他に選択するものはない」を選択して先にお進みください。

他に選択するものはない

<< >>

評価者の地域、専門研究分野にて優れた大学名を10校まで選択する

- ①研究面で優れた世界の大学
- ②研究面で優れた地域の大学
- ③教育面で優れた世界の大学
- ④教育面で優れた地域の大学

## 研究分析の基礎データとしてのScopus



## Scopusとは？

### 幅広いジャーナルを収録した世界最大級の抄録・引用データベース

学術ジャーナルは約22,000タイトル、書籍は約90,000タイトル

全収録数は58,285,347 レコード（2015年8月31日現在）

- ・収録レコードや被引用数は毎日更新
- ・プロシーディングや会議録も同時収録
- ・世界5,000社以上の出版社や学会からの情報収集
- ・発行前収録(Article in Press)対象は3,750タイトル
- ・世界105カ国からジャーナルを収集
- ・日本のジャーナルは約400タイトル
- ・40の本体言語(抄録までは英語であることが条件)
- ・2,800タイトル以上のオープンアクセスジャーナルを収録
- ・研究パフォーマンスの分析ツールを標準装備



## 研究分析データとして世界で利用が広がるScopus

### 世界の高等教育評価システムで



(Research Excellence Framework システム)

### Australian Research Council

(Excellence in Research for Australiaプログラム)

### 世界のファンディング機関で



(ブラジル)

(ポルトガル)

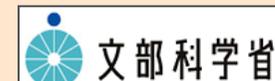
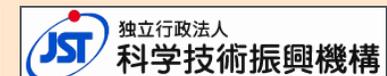
### 世界の大学ランキング作成機関で



(Chinaランキングのみ)



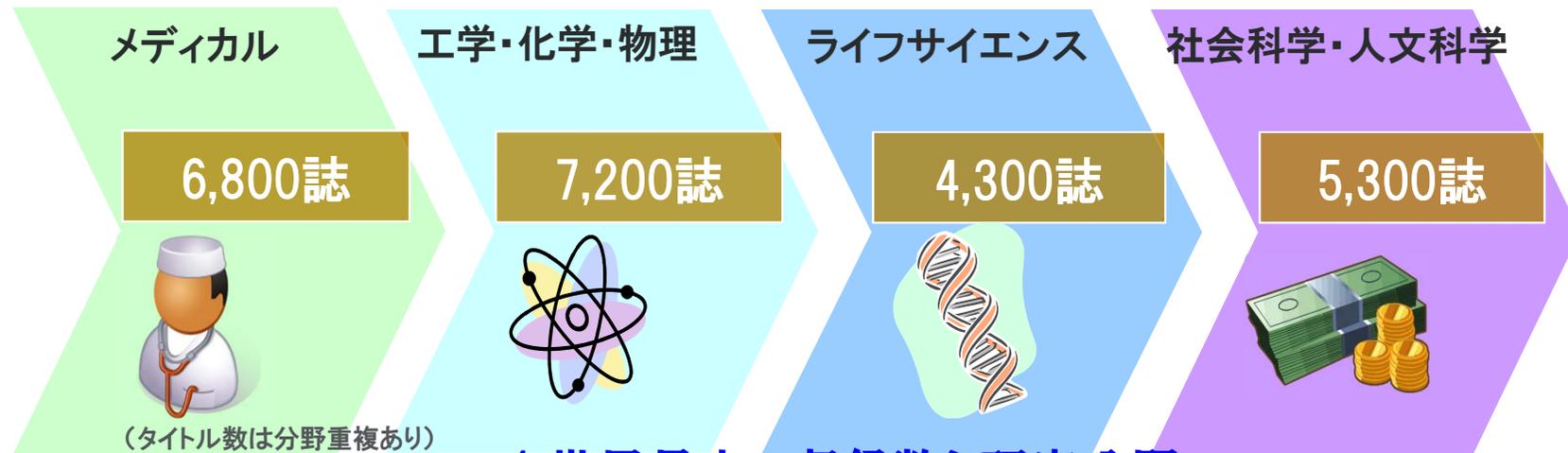
### 日本の科学技術政策機関で



## Scopusの特徴と利用者調査による人気ベスト5

		学部生・院生	研究者・教員	情報管理者・図書館員	研究推進・研究評価者
機能全般に関して	*利用者数や時間などの利用制限が無い			◎	
	*直観的な操作性(日本語画面も含めて)	◎			
	*幅広い収録範囲(ジャーナル、期間、分野など)		◎	◎	
	*多彩なデータ種類(論文・プロシーディング・書籍・特許・ウェブなど)				◎
	*名寄せ済みの著者名検索機能	◎			◎
	*名寄せ済みの研究機関名検索機能				◎
	*研究機関の所在国による検索機能				
	*出版前論文の事前収録(Article in Press)		◎		
	*利用統計レポート				
*API機能の無料利用			◎		
検索結果に関して	*検索結果の再加工(絞り込み・ソート)	◎			
	*論文による引用のリスト表示(引用分析)			◎	
	*特許による引用情報				◎
	*ソーシャルメディア等による引用と指標	◎	◎		
	*化合物や反応の構造式表示(対象ジャーナルのみ)				
	*エクセル等へのエクスポート				
	*参考文献形式でのエクスポート				
	*文献管理ソフトへのエクスポート		◎		
	*自動メールアラート配信機能				
	*論文PDFの一括ダウンロード機能	◎			
*検索結果のトレンド分析表示					
研究分析に関して	*ジャーナル評価指標(SNIP, SJR, IPP)の表示			◎	
	*投稿先ジャーナルの比較検討機能		◎		
	*著者プロフィールの表示				
	*研究機関プロフィールの表示				◎
	*著者名寄せの修正依頼機能				
*ORCID登録情報への追加機能					

## 研究分析データとしてのScopusの優位点



### 1.世界最大の収録数と研究分野

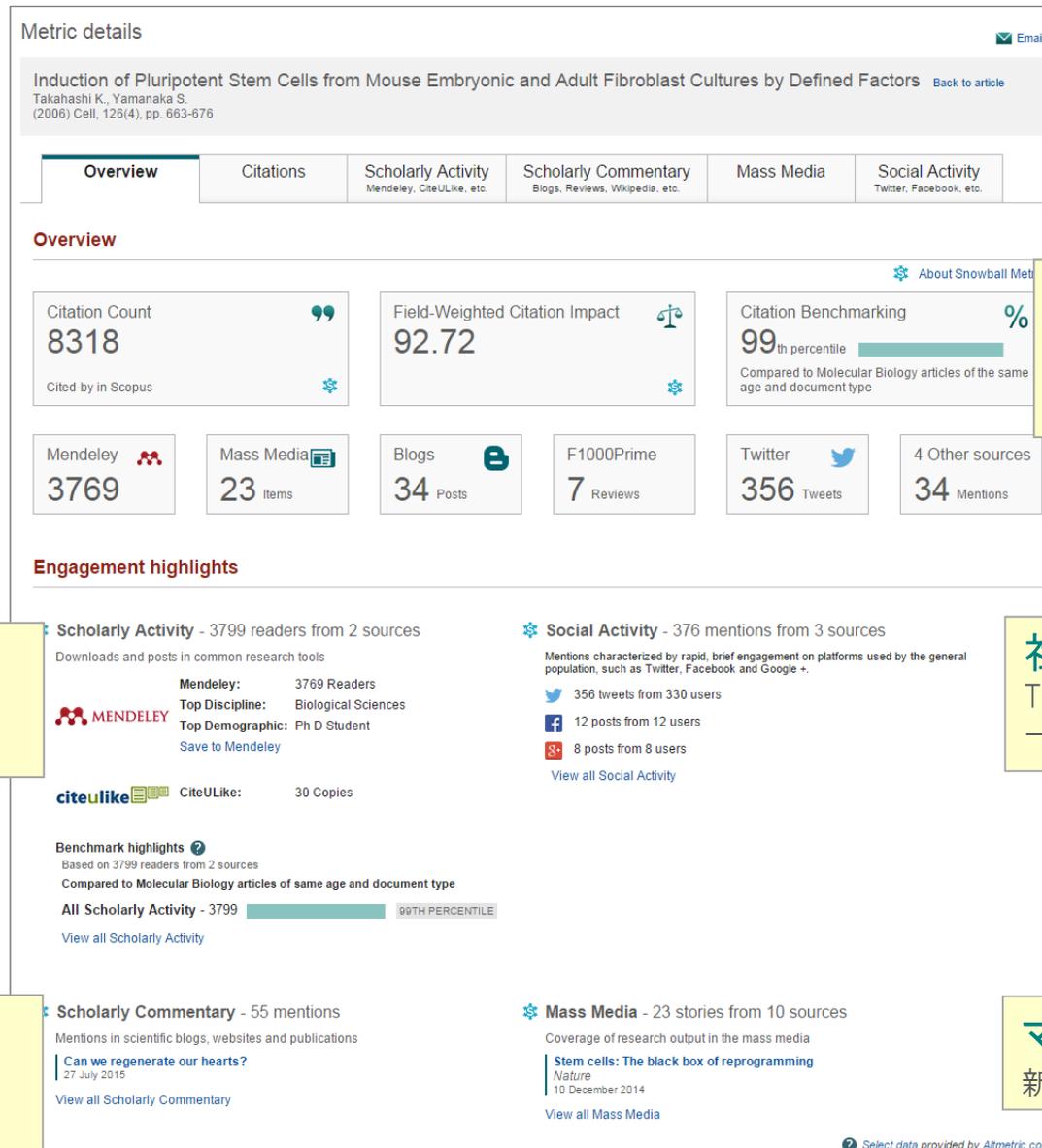
### 2.機関名の名寄せデータ



### 3.研究者氏名の名寄せデータ



# 各論文ごとに社会的インパクト指標を表示します



## 論文による引用

- ・単純な被引用数
- ・分野を補正したインパクト
- ・ベンチマーキング

## 学術的活動

Mendeley、CiteULikeなどの  
文献管理ツールへの保存

## 社会的活動

TwitterやFacebookなどの  
一般的なソーシャルメディア

## 学術的コメント

ブログ、出版後レビュー、  
Wikipediaなどによる言及

## マスメディア

新聞によるカバーなど

## 誰でもScopus APIを利用できます

The screenshot shows the Elsevier Developer Portal at [dev.elsevier.com](http://dev.elsevier.com). The page features a navigation bar with "ELSEVIER Developers", "Overview", "Use Cases", and "Explore" menus. A "My API key" link is visible in the top right. A green callout box highlights the "Explore" menu. The main content area includes a "Get started today!" section with three buttons: "1. Look at use cases", "2. Get API Key", and "3. Start coding". Below this is a "Use cases and Examples" section with buttons for "Federated Search", "IR/CRIS/VIVO", "Cited by in Scopus", "ScienceDirect Article info", "ScienceDirect Journal info", "Journal Metrics", "Text Mining", and "CORS Search Examples". A "Resources" section at the bottom has buttons for "How To Guides", "Legal & Policies", and "Support & Inquiries".

Check out APIs in action! Interactive APIs documentation is now available under "Explore" menu.

Get started today!

Elsevier's API program allows you to integrate content and data from Elsevier products into your own website and applications. [Learn more ...](#)

1. Look at use cases   2. Get API Key   3. Start coding

Use cases and Examples

Federated Search   IR/CRIS/VIVO   Cited by in Scopus   ScienceDirect Article info

ScienceDirect Journal info   Journal Metrics   Text Mining

CORS Search Examples

If you do not find your use case above, please write a short use case description and  contact us.

Resources

How To Guides   Legal & Policies   Support & Inquiries

My API key   [api.elsevier.com](http://api.elsevier.com)

APIs new

Interactive APIs

Scopus Journal Metrics: IPP is now available in addition to SJR and SNIP

Scopus Search API response now includes PII when available

Author search using ORCID

[API Release notes](#)

**Elsevier Products:**

[ScienceDirect](#)

[Scopus](#)

[Mendeley](#)

[Mendeley Developers](#)

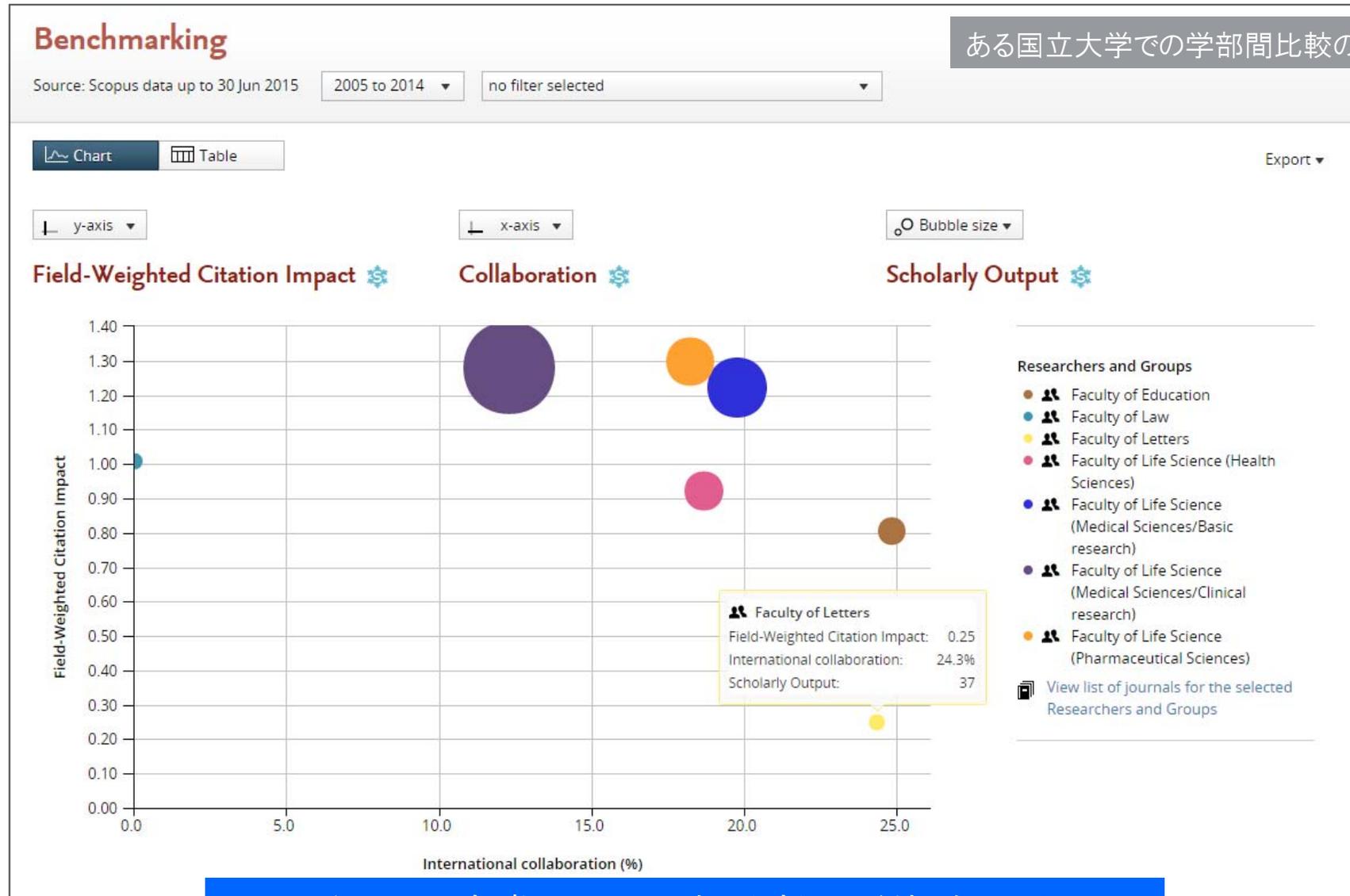
誰でもユーザー登録してAPIを使用することができます。

(注: 利用できるデータの範囲は契約機関かゲストかで異なります)

## エルゼビアの研究マネジメント製品

主な利用目的	主な利用部署	エルゼビア製品
研究活動のために正確な 学術論文を収集したい <b>収集</b>	図書館 教員 大学院生・学部生	ScienceDirect Scopus
自大学や他の研究機関、 個人から国レベルまでの 研究成果を調査したい <b>分析</b>	RA・IR 研究評価・研究戦略 産学連携 大学マネジメント	Analytical Services SciVal Data Portal
自大学の教員や研究成果を 広く世界に発信したい <b>発信</b>	RA・IR 広報・宣伝 研究推進・産学連携	Pure

## SciValによる学部間比較データ可視化の一例



展示ブースで実際の画面と操作性をご体験ください！